岐阜経済大学論集 29 巻 2 号（1995 年）

母と言葉

――アルベール・カミュの初期作品世界――(8)

鈴木忠士

まえがき
第1章　アルジェリアの母と息子
　I　カミュ略伝――『裏と表』の刊行まで　……（未発表）
　II　伝記の深層
　　A　母　……（この項の終りまで本号）
　　B　祖母
　　C　叔父
　　D　父
第2章　『苦悩』との出会い――〈読む〉から〈書く〉へ
　I　はじめに
　II　『苦悩の梗概』
　III　『苦悩』と「家族の悲劇」
　　A　母の肖像――テレーズとカトリーヌ
　　B　母と夫・恋人・息子
　　(1)　母とその夫
　　(2)　母とその恋人
　　(3)　母とその息子　……（この項の終りまで第28巻第1号）
　　C　息子と母・母の恋人・父
　　(1)　息子の肖像
　　(2)　息子と母・母の恋人
　　(3)　息子と父　……（この項の終りまで第28巻第2・3号）
第3章　『裏と表』論
　I　テクストの生成過程　……（この節のみ第19巻第4号）
　II　深層のテクスト
　　A　母のイメージと息子の母親に対する関係
　　……（この項の，途中まで第20巻第2号，
　　途中から終りまで第26巻第3号）

B　祖母のイメージ
C　父のイメージ　……（この項の終りまで第27巻第1号）
Ⅲ　『魂のなかの死』と『生きることへの愛』
A　『魂のなかの死』　……（この項の終りまで第27巻第3号）
B　『生きることへの愛』
第4章　『幸福な死』論

第1章　アルジェリアの母と息子

II　伝記の深層

私は前節「カミュ略伝――『裏と表』の刊行まで」（未発表）において，主にロットマンの『評伝アルベール・カミュ』[1]を参照しつつ，『裏と表』[2]刊行に至るまでの，いわゆる「カミュ＝サンテス家の悲劇」(98)[3]と，それを背景とするアルベール・カミュの生育史のあらましをたどった。

この略伝を一つのテクストとみなし，そこに潜在する深層のテクスト，すなわち心的意味連関あるいは構造を浮き彫りにすること，それが本節の課題である。

この深層のテクストは，第3章で分析する『裏と表』およびそれを準備した習作群において，またそれ以降に執筆された作品あるいは習作の各々において見出される深層のテクストと符号するところがあるであろうと予想される。

アルベール・カミュの生育史を明かす資料そのものが著しく不足しているうえに，あいまいな所も数多いので，ここに素描を試みる深層構造のモデルは，もちろん仮説的なものにすぎない。ただ，修正すべき誤差はありうるとしても，簡単な概念図をここで作り上げることによって，後に個々の作品を分析する際のさしあたりの手掛かりを得ておこうとするのである。

A　母

浩瀚な『評伝アルベール・カミュ』を読み通しても，カミュの母親カトリーヌの肖像は一向はっきりとした映像を結ばない。カトリーヌについての叙述でロットマンが資料としたのは，ほとんど『裏と表』およびそれに先立つ断片的習作群に登場するアルベールの母親と覚しき人にかかわる件(くだり)である。息子アルベール誕生前後の，あるいはその娘時代や，結婚からアルベール出産に至るまでの面影を伝える資料，証言はまったくと言ってよいほどない。さらに，アルベールが小学校に上がってから後，あるいはアルベールが発病して叔父アコーの家に寄寓するようになってから後の彼女の生活振りについても，彼女の「愛人」(33)騒動と「見知らぬ男に襲われた」(35)事件を除けば，何も知ることはできない。アルベールの私生活についての「秘密主義(ディスクレシオン)」(40)があったにしても，兄リュシアンやカトリーヌの妹アントワネット等親族の証言があってよいはずなのだが。ロットマンの配慮によるのか，それともアルベールにとってばかりか，カミュ＝サンテス家のすべての人々にとって，カトリーヌは終生「異邦の女(エトランジェール)」(36)にとどまり続けたのであろうか。

小学生低学年の頃からすでに顕著であったというアルベールの「秘密主義」は何に由来するのか。小学校の友達でアルベールの家を訪れた者は「数少なかった。」(39) リセ時代は寄寓先のアコー家で級友たちの訪問を受けた。大学生になると，学友たちはアルベールの「兄の家」や下宿先の「屋根裏部屋」(81)でアルベールに会い，「カミュの家を訪れた者は誰もいなかった。」(80)それはリセや大学で，アルベールが「ベルクール出身であったため，彼を見下す者もいた」(50)ということからくるのだろうか。実際，リセや大学時代の友人たちの中には，「彼が貧しい家庭の出であることに，まったく気がつかない者もいた」(40)し，アルベールが大学生のとき知り合った同じベルクール出身のある若者は，「これほど上品で，立派な服装をしている青年が，なんであれ，ベルクールのしがない人間たちのことを，いったいどうして知るこ

とができたのだろう」(94)と大いに訝ったということである。

アルベールは「自分の住居を，家族を，家政婦をしている母親を，恥じていたのであろうか？」(39) すでに小学生のときから彼の「驚くべき才能」(45)は人目を惹いていた。リセにあっては，「フランス語だけ」にしろ「飛び抜けてできる」(50)生徒で，その最終学年のとき，新任教員のグルニエに「きわめて前途有望な青年」(55)と注目された。大学では，彼と出会った若者を「並外れた才能をもつインテリ」(94)として魅了したという。そうしたアルベールにとって，ベルクールの「本もなく，新聞や雑誌さえも見あたらない閉ざされた世界」(39)が秘すべき恥部として意識されていたとしても不思議はあるまい。

その「秘密主義」はまた，私生活のことは手紙の中でも友人たちとの会話の中でもめったには口に出さないという，「アルジェリアのフランス人，地中海人によく見受けられる」，「私生活」と「公の問題」(91)を厳然と区別する考え方によるのであろうか。あるいは，これも「アフリカ人気質」であるという「度を越した矜持，必要以上に強い感受性」ゆえの「秘密」(134)のヴェールであったのか。

だが，自分の母親が「スペイン系」であることをも秘し，「母は精神病で，オランに住んでいる」(40)と言うことさえもあったということは，上のような説明だけでは理解できまい。もっと深い，特殊な理由があったのではないか。

カミュの父親は，1913年11月7日生まれの次男アルベールが生後8カ月のとき出征し，1914年10月11日，アルベールが生後11カ月のとき死亡した。父リュシアン・オーギュストは1888年11月28日生まれであるから，29歳に，1882年11月5日生まれの母カトリーヌは32歳に，それぞれなろうとするところであった。1910年1月20日生まれの長男リュシアンは3歳と9カ月であった。

夫の出征とともにカトリーヌは二人の幼児をかかえて，母親の住むアル

ジェの，ベルクール街リヨン通りのアパルトマンに身を寄せる。数カ月後，夫の死を知らせる電話を受けとり，夫の体内から取り出された砲弾の破片が形身の品として送られてくる。このとき蒙った「精神的なショック」(29)から重度の抑うつ状態に陥ったと思われるが，それが単に反応性のものであるのか，そこに先天的な素因が働いていたのかは不明である。それまでの夫との関係如何はもちろん，娘時代の生活振りについてもまったく知られていず，ただ「ことのほか華奢で感受性の強い子供だった」という，おそらくは妹アントワネットの「思い出話」(24)による証言があるばかりなのであるから。

カトリーヌはこの抑うつ状態から，はっきりとした形では抜け出ることはなかったように思われる。「精神的なショック」がもたらした「言語障害」と生来の「難聴」もそこに与って，彼女は「親しい人びと以外には，極端に他人に対して臆病になった」し，カミュ＝サンテス家の内においても「極端に受動的な女」(30)になったという。重度の抑うつがその軽快後も，それ以降の彼女の性格と行動様式を枠付ける一つの鋳型となって遺ったということであろう。

生後11カ月のアルベールは，「相対的依存」(ウイニコット)あるいは「甘え」(土居)の盛んな時期にあった。成人した後のカミュに接した人々の多くは，その親しみやすく，情愛の深い人柄についての印象を語っている。他方，彼の対人関係の特徴として，「絶えず同伴者――男なり女なりの――を欲し，あるいは必要としていた」とか，「カミュよりやや年上の男は，カミュに対して，ともすると父性的な感情を抱き，女は母性的な感情を抱く」(399)傾きがあったとも言われている。そこに人間関係の基としての，積極的な意味での「甘え」や，「愛情行動」(ボウルビー)に親和的な資質を認めることは容易であるだろう。母カトリーヌは，極度のうつ状態にあったときはもちろん，軽快した後にも，息子のこのような「甘え」や「愛着」に応えることができなかった，あるいは情愛の表現すら覚つかなかったのではないだろうか。

アルベールの兄リュシアンは，専横な祖母の死んだ後，「私たちは母と一緒で幸せでした」(34)と言っている。そこから推察すると，カトリーヌも夫の死の報を受けとるまでは，少なくとも〈まずまずの母親〉であったと思われ，アルベールの「甘え」もそれまではまずまず充たされていたことであろう。そこに，突如母親が重度の，ついで慢性的な抑うつ気分に陥り，「身の回りで起こること」に対して「完全に」あるいは「ほとんど」，「無関心」[4]になってしまったということなのである。

母親の「無関心」は幼児にとっては遺棄を意味する。それは幼児のうちに母親への怒りと敵意をひき起こすが，それはやがて抑圧される。なぜならば，第一に，母親は幼児にとって即世界であり，全能感に充ちた敵意によって母即世界を壊滅することは自らの生命の基盤を破壊することになるからであるし，自らの敵意が投影されて転化した，母親からの敵意を避けるには，原因としての自らの敵意を抑止する以外にないからである。第二には，狙い定めたはずの敵意が，確たる対象をもたず，焦点を結ばないことにやがて気づくからである。母は確かに目の前にいて，必ずしも自分を嫌っているとは見えないが，自分を「確かに愛してくれている」（フロイト）という証もない。「ここにいて，しかもよそにいる」ような「二重」[5]の存在なのである。怒りもまた外界への呼びかけなのだが，それさえも応答を得られないという，「応えのない〔口の利けない〕世界」[6]にいるのだと幼児は悟る。そこで，外界への無益な呼びかけを止め，外の世界への，そして外の世界からの敵意を鎮め，失意のうちに己れの殻に閉じこもる。これが「うつ病等価体」（笠原）としての，人生最早期における抑うつ体験である。

後年のカミュに見うけられたという「旅が彼のうちに言いようのない恐怖をひき起こす」(126)傾向は，こうした母即世界からのいわば根源的な遺棄の体験のうちにその淵源を求めることもできよう。また，成長過程の端緒における「甘え」あるいは「愛着行動」といった，自己の身体を超え出て，物理的空間を自由な人間的空間に変容していく働きかけに応えを得られず，世界

も自己も物理的な空間のうちに封じこめられてしまうという，根源的な閉塞状況の体験のうちに，成人したカミュに顕著に認められたという「時々密閉した空間で彼を襲う〔……〕密室恐怖症」(456)，「密室恐怖症の形をとった罪の意識」(573)，あるいは壁に閉じこめられた独房のテーマへの偏執が根差しているとも言えよう。さらに，カミュの作品に見え隠れする母親殺しの妄想とそれゆえの罪責感も，根源的遺棄の状況における被害・迫害的妄想体験のうちにその原型を求めることができよう。そしてまた，死への不安と死への願望も抑うつ的な母即世界の体験にその源をたどることができるだろう。メランコリーに沈む母の心の中では，内的対象としての子供は死んでいるので，死の不安が子供の心のうちにかきたてられるとともに，拒まれることで子供は一層母親と一体化しようとして，母の心の中の内的対象としての死んだ自己になろうともするからである。〈メランコリー＝死〉の中の〈遺棄＝死〉への不安は，〈メランコリー＝死〉への同一化によって解消されるのである。アルベールは終生「自殺の思い」(632)にとりつかれていくことであろう。

カミュが「私の中の，生まれつきの欠陥(アンフィルミテ・ド・ナチュール)のような，あの根源的な無関心」[7]と呼ぶものは，この原初の母即世界の「無関心」への同一化の所産であり，かつまたそれへの心的な防衛機制であるだろう。また，1940年代の末頃からの，彼自身もはっきりと自覚していた「長く悪質なうつ病」(634)も，素質的なものもあるのかもしれないが，この原初的な抑うつ体験にその原型をもとめることができるのではあるまいか。

1950年代後半のカミュが，青春時代には知らなかった「真の絶望の時代」[8]を経験したと語るとき，この「真の絶望」とは原初の「絶望」を原型とするものであり，「生得的な宿命」[9]として後に思念されるものもまた，その源にこの原初の「絶望」をもつと言えるであろう。

ただ他方では，原初のメランコリー＝死の呪縛からの，そしてそれを原型としてくり返しよみがえるメランコリーの閉塞状況からの脱出を可能にするものはあって，それは第一に外界からの母親（代理者）による働きかけであ

るが，それとともに子供の身に備わるエロス的本能であるだろう。「愛着行動」とか「甘え」とか呼ばれるものは，そうしたエロス的本能の可視的な現われにすぎない。カミュの場合，後年の活動と対人関係のあり方から推して，この本能は桁外れのものであったようだ。カミュ自ら「好奇心，沈黙，エネルギー，そして感動に充ちあふれた子供時代」[10]であったと言っている。リセ時代はサッカーや水泳に熱中し，結核の発病後も，常に二つ以上の分野で，二人前三人前の仕事をこなしていった。カミュ自身の言葉で言えば，彼は「生きることへの常軌を逸した欲求」[11]に衝き動かされていた。また，彼には「並外れた表情の活発さ，したがって明らかに感動しやすい性質」(476)，「周囲に友情と信頼に溢れた好ましい雰囲気を醸しだすことにかけて」の「計りしれない才能」と「陽気」(113)さ，重い抑うつ気分に支配されていたときですら，人に感じさせることのできた「親密な温か味」(635)が認められた。

すでに述べたように，アルベールが11カ月になるまでは，カトリーヌも〈まずまずの母〉であったと推測される。11カ月とは，全体対象としての母の統合的イメージが確立されつつある時期である。母親の「まずまず」の愛撫と応答も，アルベールの生得的な「官能性」(442)の強さ，愛の能力の大きさからすると，母と子の間の極めて濃密な体験，「根源的エロス」(森山)の体験を確信させたことであろう。そして，このエロス的体験の記憶痕跡である「エングラム」(ジェイコブソン)は，内的対象としての〈良い母〉の原イメージを形成するにあたって大いに与るところがあったであろう。それだけに，応答も関心も見られなくなった母との関係は，失楽園に等しい体験であったにちがいない。

さて，アルベールの身に備わる並外れたエロス的本能は，もはや愛されてはいないと悟られる自己を自ら愛するという形でまずは働くと言える。それは「ナルシシスム」(土居)である。だが，エロス的本能は本来，自己の枠のうちにとどまるものではない。アルベールの場合，11カ月までの確かに愛

されていたという「エングラム」が，エロス的エネルギーを外の世界に向ける基体とも回路ともなったであろう。ナルシシスム的な偏向をこうむりながらもこのエロス的能力は，「できるなら，愛され，認められたいと思う。あるがままの姿で，だれからも」という「欲求」として，幼いアルベールを外界へと衝き動かす。「別け隔てるあらゆるもの」は自分を「戦慄させる」(586)ものとして取り除けようとする。この「認められたい」という願望は，アルベールのように有能な子供の場合には，「自分自身の価値」を確信し「その価値が他人に認められるのを期待」するという「誰にもまして成功への欲求を抱」(445)くという方向へと駆り立てるであろう。

後年のカミュが自ら認めていた自身の内なるエロスとタナトスの双極的な葛藤と，そこに生ずる「根源的な無秩序(アナルシー・プロホンド)」12)は，幼児期におけるこうした楽園＝根源的エロスの体験から，失楽園＝メランコリー＝死の体験への，突然の移行がもたらす混乱のうちに根差すものであるにちがいない。1937年7月，24歳を少し前にしてカミュは，上梓したばかりの『裏と表』への書評が「苦さ，とか，ペシミズム」ばかりを取り上げ，「僕が人生に見いだしている味わいや，肉の味をいっぱい嚙みしめたいという僕のいだいている欲望」，「死それ自体や苦悩は，僕のなかでは，こうした生の野望を一層激しく燃え立たせるだけだということ」13)が理解されていないと訴えて，彼が早くから自身の内なる二重性についてはっきりと自覚していたことがわかる。また，1951年5月，38歳になったカミュが，「自分のなかの，もっとも基本的なもの」は「幸福への欲求」，「人間に対するたいそう生き生きとした意欲」，「堅固不抜な一つの太陽」14)であり，それは「自分の意図以上に《暗い》作品」15)と対立すると主張するとき，あるいは「ギリシャは，闇であり，光なの」であり，「太陽には暗い反面がある」のだと，存在の「二重性」16)について語るとき，彼は言葉を変えながら同じ事態を言い表わそうとしているのだとも言えよう。彼のこの「内なる矛盾」(557)は，周囲の者も容易に気づくほどのものであったようだ。リセ時代のカミュの友人のひとりは，「滑稽な

ほどはなはだ陽気にもなるが，ときどき見せる憂愁に満ちた倦怠の色」(63)に注目しているし，大学時代の彼を知る者は，「相変らず絶望を《思考し》，それを書き記そうとしている。それでいながら，彼は希望に《生きて》いる」と，その「矛盾の精神」(113)を指摘している。また，1957年，マルタン・デュ・ガールは，「節度のある，しかし不断に躍動する感受性であり……いつまでも変わることのなさそうな，裡に隠れた憂鬱である」(616)と，カミュの性格の特徴について述べている。

このアルベールの充ち溢れるエロス的本能はまた，遺棄という現実を否認する。その否認はまったく根拠のないものとは言えない。彼が11カ月になるまでは，カトリーヌも〈まずまずの母〉であったろうと推定されるのだから。まして，その豊かなエロス的能力が11カ月までは開発的環境におかれていたのであるから，幼いアルベールにとって己れのエロス的開花を否定するような現実を否認することは，いわば己れの死活をかけた心理的操作であったと言えよう。

以下，ロットマンの『評伝アルベール・カミュ』の中で，成人後のカミュとその母，および母の住むアルジェリアとの関係にかかわる記述を列挙してみる。

1934年から1942年8月頃までのカミュの生活を熟知していた知友のひとりによると，カミュは母親に対して「いつも非常に熱心に世話をしていた」[17]し，折にふれて，経済的な援助も怠らなかったようだ[18]。

カミュは1940年にアルジェリアを離れるが，翌1941年1月，妻とともに妻の実家のあるオランに滞在する。その間，「かなりの時間をアルジェで過ごした。」「母親やその他の家族や友人に会うため」と「仕事を探すため」(249)であった。同年8月にはフランス本国にもどるが，妻が「10月の中頃」に職と住宅を求めてアルジェに行くと，彼もそのあとを追って「11月」(280)にはアルジェに帰ろうとしていたようだ。しかし，11月11日，ドイツ軍が

進攻，フランス全土がその支配下におかれ，北アフリカと本土は完全に切り離される。解放後の1945年下旬，「自分で自分に課したルポルタージュを完成するため」に，ほぼ「3年」(367)ぶりでアルジェにもどり，「3週間」(369)滞在する。1947年「11月に，彼はアルジェへ飛んだ」(442)が，用向きが何であったかロットマンも明らかにしていない。1948年，「1月」から子供を連れてオランに里帰りしていた妻に「合流」(454)する。その折，アルジェの「実家を訪れ」てもいる。これに先立ってカミュは旧友のひとりに，「アルジェリアに帰りたい気持を打ち明けていた」(455)が，このときの帰郷の際にも同じ意向をもらしている。1月から3月にかけて，ほぼ5週間の滞在であったようだ。同年の夏，プロヴァンス地方のリール＝シュール＝ラ＝ソルグの借家で休暇を過ごしているところへ，「母親がやってきた」(459)が，その滞在日数や生活の詳細については何も明らかではない。同年12月末に，叔母のアントワネット・アコーが大がかりな手術をうけるというので，アルジェに飛び，「少なくとも10日間」(467)以上は滞在して，「母と二人きりで」(468)会ってもいる。1951年11月19日，「母が骨折のために手術を受ける」(503)という知らせをうけて，直ちにアルジェに行き，数日いて，チパザも訪れている。1952年「12月1日」(525)，サハラのオアシスの町，ラグアット，ガルダイアを訪れることを主な目的としてパリを発ち，12月下旬までアルジェリアにいたようである。この間，「母と兄に会うために」アルジェに「1週間留ま」(526)り，またチパザも訪れている。1953年「2月18日」(553)アルジェに向かう。用向きははっきりせず，当初は気分転換のためであったろうか。2月一杯滞在し，「3月1日」(555)にパリにもどる。チパザにも行っているが，母親と再会したかどうかロットマンは明らかにしていない。1956年「1月18日」(576)，アルジェに赴く。同月22日のアルジェリア「休戦アピールの集会」(579)に参加し，講演するためである。このときは短期の滞在であったと思われ，母親に会ったかどうかロットマンは明記していない。翌1957年10月，ノーベル賞の受賞が決定する。このときカミュは母親に，「これほど彼

女に傍にいて貰いたかったことはない」(616)と電報を打ったという。1958年3月20日，船でアルジェに向かう。「故郷に錦を飾る」(634)趣きのある帰省であった。同年「4月12日」(636)にアルジェを去るが，その間「ベルクールの母の訪問」(634)もあった。1959年3月，「77歳」という高齢で母親が手術をうけたというので，アルジェに行き，「1週間」(651)滞在する。1959年12月，カミュは母親に「しばらくしたら迎えに行きます。夏中われわれと一緒にフランスで過ごして下さい」(668)と手紙を書く。翌1960年1月4日，カミュは自動車事故で死亡し，同年「9月」彼の母親も後を追うようにして「ベルクールのアパルトマンで」(679)死去する。

このように見てくると，様々な理由の下にではあるが，カミュが定期的にと言ってよいほど，かなり頻繁に母親と会い，連絡をとっていたことがわかる。ロットマンが書きもらした出会いや，連絡もあったであろう。とりわけ1954年11月1日，アルジェリア戦争が起こってから1960年1月4日の事故死まで，カミュは「アルジェリアに病んで」[19]おり，「彼の苦悩は，戦争が激化するのに伴って増大してゆき，彼の生涯の最後の36カ月間を通じて，決して和らげられることはなかった」(646)というのだが，その彼の念頭にはいつも母親のことがあったと思われる。なぜなら，ある面から見れば，カミュにとってのアルジェリア問題は，カミュの発言の上では，あたかも彼の母親の問題であるかのような観を呈しているからである。

アルジェリア戦争が激化してゆくなか，1956年1月22日の市民休戦アピール後の3月，カミュは次のように語って旧友を驚かせたという。「テロリストが，私の母がよく買い物に出掛けるベルクールの市場に手榴弾を投げ，母を殺したとしよう。もし私が正義を擁護するためにテロを弁護したとしたら，私は母の死に責めを負わねばならなくなるだろう。私は，正義を愛する。しかし，母も愛している。〔傍点は鈴木，以下同じ〕」(587)[20]

そして，1957年10月，ノーベル賞を受賞することが決まったとき，カミュは「アルジェの方へと振り返り」，「そこには，私が世界中で最も愛する

人」(617)がいると言い,「下書の状態のまま放置」されたある手紙の中で,「私にとっては何の危険もない言明によって,アルジェの群衆に発砲するかもしれない馬鹿げた狂信に対して,良心の苛責を取り除いてやることは絶対に欲しません。その群衆の中には,私の母と,総ての親類縁者がいるかもしれないのです……」(620)と述べている。さらに,12月12日のストックホルム大学における学生との討論会の席上では,「私はまた,例えばアルジェの街角で,盲滅法に行なわれるテロ活動も断罪しなくてはならない。いつの日か,私の母と家族が,その犠牲者にならぬとは限らないのだ。私は正義を信じる。しかし,正義より前に母を守るだろう」(626)21)という有名な発言を行なった。また,ロットマンによれば,当時「カミュの友人の大部分は,無差別テロへの恐れ,爆弾が公共の場所に仕掛けられ,母を殺すことになるかもしれないという恐れが,彼の〈F.L.N.〉に対する反対の唯一の真の原因であることを承知していたのである。」(633)

そのような文脈の下で見るなら,ストックホルム発言も決して唐突のものとは思われなくなる。「母」は人命の象徴であることを超えている。カミュのおそれた「母の死」とは,母カトリーヌその人の「死」のことである。それは彼の「母」への「愛」の何よりの証ではある。けれども,あえてシニックとの批判をおそれずに言えば,見方によっては,そこに強迫的な観念の潜在を疑うこともまた可能に思われる。「母の死に責めを負わねばならなくなる」という表現に注意したい。あたかもカミュ自身が間接的にも「母を殺」すことになるかのようであり,それを恐れているかのようなのだ。あたかもはるかに遠い原遺棄の状況下における,母への「殺」意にまで昂まる制約を知らない敵意と,それゆえの「負」い目の再現をおそれているかのように。

カミュが真に情の厚い人であったことは,ロットマンの伝記を見れば,疑いえないことである。彼の「母」への「愛」に偽りがあったというのではない。ただ,そこに幻想的,あるいは妄想的な要素がまったくなかったか,と問うことはできよう。

カミュは1948年に二度アルジェリアを訪れていて，一度目のときは，「アルジェリアに帰りたい」(455)という気持を口にしていた。しかし，二度目のときは，「滞在の間中，奇妙な違和感が，町の中を歩きまわる彼につきまとっていた。彼はもうできるだけアルジェリアには戻らないようにしよう，と決心した」(468)という主旨のことを語ったということである。このように，彼のアルジェリアへの郷愁には「奇妙な」アンビヴァレンツが窺われる。前者の訪問の際，旧友が，「カミュが求めているのは定住するための家ではなくて，一つのオアシス，パリ生活から逃れることのできる避難所なのだ，と理解した」(455)のはおそらく正しい判断であろう。

アルジェリア問題についての発言に端的に現われていたように，カミュにとってのアルジェリアは，まさに〈母なるアルジェリア〉なのであり，「一つの」というよりは唯一の「オアシス」なのだ。そして，その「オアシス」としてのアルジェリアについて，1952年12月，在りし日青春の生命を謳歌したチパザに遊んだ後で，「かつてと同じ感動，同じ郷愁を感じることを発見して，彼は心が静まる思いだった。これこそが，アルジェリアに探し求めていたものなのだ。〔……〕それは幸福ではない——むしろ，ある種の悲しさ，彼の心を揺り動かす何かしらなのである」(526)という内容のことを友人のひとりに打ち明けたということである。このメランコリックな「何かしら」は，彼にとっての「オアシス」＝母なるアルジェリアの意味するところをよく語っているように思われる。カミュにとって，母は変ることなく「同じ感動」と「同じ郷愁」の対象でありつづけたであろうが，しかしそれは遠くにありて想うべき存在であったのではあるまいか。多くの偶然の重なった結果であるにしろ，結局彼がノーベル賞の賞金で購った終の栖は，母なるアルジェリアでもそれを偲ばせる地でもなく，叔父アコーに継いで，カミュの父親代理者を果し，また果し続けた者のひとりとみられているジャン・グルニエが推賞したルールマランであったことは，そのひとつの証であるように思われる。

「根源的エロス」の体験に根差す甘い体験への「燃えるような渇き」[22]は，現実の母の有り様を否認することによって防衛された〈良い母〉という内的対象を，あれこれの母親代理者たちに投影していく。たとえば，アルベール少年にとって〈良い母〉の代理者のひとりは，実母の妹アントワネットであったようだ。先に見たように，叔母の手術のとき，カミュはアルジェまで飛んで経過を見守ったのだった。青年期においては，22歳のカミュを自家用飛行機に乗せてジャミーラへ連れていってくれた女流画家マリー・ヴィトン，すなわちマルグリット・デストゥールネル・ド・コンスタン男爵夫人も母親代理者のひとりであったかもしれない。彼女は当時カミュより10〜15歳年長であり，「女である前に友達であった」(120)と言われているが。また，〈世界を望む家〉の同居者，彼の「親衛隊」(135)員のジャンヌ・シカールとマルグリット・ドブランも何ほどかはそうであったかもしれない。

さらに，「1943年1月」(328)彼女が「20歳」(329)のとき初めて知り合い，翌1944年6月に上演された『誤解』の主人公マルタを演じたマリア・カザレスも，すぐれて母親代理者のひとりであったと思われる。マリアは，スペイン市民戦争下にパリに亡命してきたスペインの首相の娘であった。カミュの母方の血筋はスペイン系であることに注意しなければならない。そして，カミュにとってのスペインは，アルジェリアとともに，愛憎してやまない〈故郷〉のひとつであったことを考え併せねばならない。1944年「3月」(329)『誤解』の稽古が始まるが，「このときから，そしてカミュの死の直前まで，病気のときも健康のときも，マリア・カザレスは決してカミュから遠ざかることはなかった」のであり，「彼女はカミュのスペインの血筋を，また後には，たんにスペインの政治情勢に対してのみならず，その文学や演劇に対する特別な関心を，一身に具現していた」(331)のである。マリアはカミュの恋人である以上に，〈母〉であったように思われる。

カミュの第二の妻フランシーヌ・フォールには「ユダヤ系ベルベール人の血が流れている」(199)ことに，母カトリーヌにも同じ北アフリカのモール人

の血が流れていることを想起するのは，あるいはうがち過ぎかもしれないが。

この内的対象としての〈良い母〉の投影という現象は，相手が女性，とりわけ庇護的な立場の女性である場合に限られなかったであろう。原初の母との対象関係がそれ以降のすべての対象関係の原型となるとすれば，すべての対象関係において，〈良い母〉の投影がなんらかの形で見出されるはずである。実際カミュは終生，程度の差はあれ，母性的とも言える保護的な空間に包まれていることを常に必要としていたようである。たとえば，1937年に『裏と表』を上梓してすぐ後，友人にサナトリウムでの療養をすすめられたとき，「見知らぬ人たちに囲まれながら病人の世界で暮らすのは耐えられない」，「僕には，君たちみんなと一緒にいるときに感じる，あの暖かな仲間意識が必要なのだ」(152)と答えている。この言葉は，結核の発病直後の，「一日か二日のことでしかなかった」(56)というムスタファ病院への「入院」の体験が「彼を震え上がらせてしま」(55)ったことを想い起こさせる。いずれの場合にも，アルベールを「震え上がらせ」たのは，死の恐怖以上に，「仲間」たちと「一緒」にいる世界から追放され，「見知らぬ人たちに囲まれ」た見知らぬ「世界」にとり残されることへの恐怖であったのではないかと思われる。

カミュが「絶えず同伴者――男なり女なりの――を欲し，あるいは必要としていた」こととか，1949年6月末から8月末にかけてのラテンアメリカ旅行の間，うつ病期のこととはいえ，「傍らに親しい人間がいないと駄目なようだった」(482)ということなどは，親密な空間を絶えず自分の回りに醸成せずにはやまなかった彼の傾向をよく示していよう。

このことは他方での，若い頃にはとりわけ顕著であったという「過度の親密さに対する格別の警戒心」(80)とか，全盛期に際立った「非妥協性」(366)などとは一見するところ矛盾するようだが，両者は同じ楯の両面をなす事柄なのである。青年カミュの独立不羈の姿勢，および大学教師たちの「尊敬に裏打

ちされた友情」をかちえた「年齢の差を感じさせない成熟振り」(81)と，他方での1946年ニューヨークで，中年の彼と知り合った者の目に，「カミュは世間知らずで内気な，頼りない男と映った。彼の爽やかさも，ほとんど子どもっぽさに思えた」(403)という矛盾する二つの印象もまた，表裏一体をなす事柄なのである。ライフ・サイクルということがあるにしても，無から有が生じるのではなく，潜在的であったものが顕在化するということであるだろう。後者の観察が，異郷にあるカミュについてのものであることに注意しよう。

理想化された内的対象としての〈良い母〉が投影されている対象関係には，程度の差はあれ，幻想的な要素が入り込んでくる。しかしカミュの場合，周囲との親密な関係は，幻想としての「周囲との一体感」(土居)とは言い切れない。彼の場合には，一定限の「根源的エロス」の体験があり，またそこに開発された並外れたエロス的欲求がある。彼の対象関係の親密さは，いわば内実のある幻想に充たされていたと言えるのではないか。少なくともカミュの友人たちの口に，カミュの親密な感情表現に真情が欠けているという批判は上ったことがないようである。

この内実ある幻想としての親密さへの過剰な欲求は，それが充たされなかったり，裏切られたりしたときには，激しい落胆をひきおこすことが予想される。たとえば，1947年秋にケストラーがカミュを殴ったときに示したカミュの反応にその証のひとつを見ることができよう。その後，カミュは車でサルトルとボーヴォワールを送っていくのだが，途中で目に涙をうかべて「友達だったんだ。なのに俺を殴りやがった」(451)と言って，ハンドルに突っ伏してしまったという。

この変らぬ，内実ある幻想としての親密さへの欲求ゆえに，カミュはいたるところで友情と尊敬をかちえ，生涯の友となった者も少なくなかったが，他方では，親密さへの期待を裏切った者は終生の敵となった。後者の好例として，サルトルとの関係が挙げられるだろう。1951年10月『反抗的人間』

が刊行されると，翌年4月，フランシス・ジャンソンはカミュ批判の論文を執筆するのだが，同じ頃サルトルとボーヴォワールはカミュと出会う。その折にボーヴォワールのうけた印象によれば，カミュは「一瞬たりとも，二人の友人が，この作品を気に入らぬことがありえようなどとは，思ってもみない様子だった。」(510) 信頼する「二人の友人」の前で有頂天になっているカミュの姿と，内心の「気に入らぬ」気持もジャンソンの批判文のことも包み隠して，憮然としていた「二人の友」の姿が目に浮かぶようである。1952年『レ・タン・モデルヌ』誌5月号に，問題のジャンソンの論文が掲載されると，カミュは「明らかに，不意打ちを喰らったのだ」(511)った。そして，同誌8月号に，「主幹殿」という呼びかけで始まるカミュの手紙と，それに対するサルトルおよびジャンソンそれぞれの反論が一挙に掲載される。これが世に名高いカミュ＝サルトル論争であるが，これがその始まりであり，またその終りであった。

ロットマンによれば，今日振りかえって見ると，サルトルとジャンソンの反論には明らかにカミュの「人格に関わる攻撃〔強調は原著者〕」があって，それはカミュが思ってもみないことであった。それどころか，「サルトルの暖かい友情を，明らかにカミュは当てにしていた」のである。この論争を以てふたりの友人は決裂するが，「この傷は，生涯の終りまで，彼〔カミュ〕を苦しめることになったのである。」(520) このようなカミュの反応は，彼の生育史とそこに根差す彼の性格および対象関係にかかわる先の考察を念頭におけば，よく理解できることと思われる。

ヴィッジアニによる「アルベール・カミュの将来の伝記作者のための覚書」[23]は，全135項目にわたるヴィッジアニの質問にカミュが答えたインタビューの記録である。項目によってはヴィッジアニの注が付してあって，カミュの叔父エチエンヌに触れた項目では，「彼の姉〔カトリーヌ〕と同じように，エチエンヌは優しく物静かな性質であった」[24]とヴィッジアニは述べて

いる。これらの注についてもカミュの目が通っていたかどうか明らかではない。質問表をめぐるやりとりのなかで，カミュ自身がこれに近い表現を使ったのか，あるいはカミュの言葉からヴィッジアニがそのような印象を受けてこの注のようにまとめたのであろうか。

ロットマンはこのエチエンヌについて，「彼は突然癇癪玉を破裂させる男である反面，手にまめして働く正直な労働者でもある」(33)と，ヴィッジアニの描くそれとは異なったエチエンヌの肖像を呈示している。ロットマンは，「まだ彼〔カミュ〕が恨みがましい気持でいっぱいであったときに書かれた」習作『貧民街の声』に，また『幸福な死』ではカルドナ，『口をつぐむ人たち』では「理想化された形で描かれ」たイヴァールとして，『最初の人間』では「ありのままに思い出」(32)されて，エチエンヌが登場していると述べ，これらの作品における記述を資料として総合的に判断したものと思われる。

ヴィッジアニとロットマンのいずれが描くエチエンヌも実像に合っているかどうか確証はないとしなければならない。ただ，兄リュシアンの「証言」があって，事実であったことが確かな，カトリーヌの「愛人」(33)を相手とする暴力的な挙動を見ると，エチエンヌには，普段の「物静かな」起居の陰に「突然癇癪玉を破裂させる」というような，激しい情動が潜んでいたのではないかとも推測される。

彼の母親，つまりアルベールの祖母にあっては，こうした情動面での激しさは顕在的であったようで，たとえば幼い子供たちを「何かにつけて牛の脚筋で作った鞭で力いっぱいひっぱたいた」(32)ということである。

そうしてみると，「彼の姉」つまりアルベールの母にも「同じように」，その「優しく物静かな」物腰の反面において，情動の昂まりに衝き動かされる振舞いが見られることもあったのではないかと思われる。このことは，先に推定したような彼女の不断の抑うつ気分と矛盾しない。抑うつには「激越発作」という極端な情動の表出が見られることがあると言われているのだから。

実際，カトリーヌは「極端に受動的な女」にばかりとどまっていたわけではない。祖母が反対しているときに，「口をはさん」(46)で，アルベールがリセに進学できるようにしたのはカトリーヌであった。また，ロットマンの推定では「48歳」(33)を過ぎて「愛人」をつくってもいる。

確かに，これらは意志や感情にかかわることであって，情動の問題ではない。けれども，とりわけ後者の事件だけでも，カトリーヌが息子から見て，日頃の「物静か」で「受動的」で，さらには何事にも「無関心」な母という固定的なイメージをくつがえし，得体の知れない淵をかかえた存在に変ずるに十分であったろう。そこに突発的な激しい情動の表出が，まれにでも加われば，「優しく物静か」な母という〈良い母〉を内的対象として築きあげてきた息子にとっては，それは信頼する世界の崩壊にも似て，戦慄と恐怖を覚えさせるものであったにちがいない。

日頃の平静あるいは無感覚といった外見の下に，不意に激しい情動が時として露呈するという，性格の二重性をアルベールの母親のうちに仮定してよいとすると，アルベールが幼いとき祖母あるいは母親から聞いた，死刑を見物に行った父親がもどってから吐いたという話は，意味深いものに見えてくる。ロットマンは『最初の人間』の記述を根拠にして，この「逸話を話して聞かせたのは，たぶん〔……〕祖母カトリーヌ・サンテスであったのだろう」(34)と推定しているが，それならなぜカミュは，『異邦人』や『ギロチンに関する考察』25)では「母親」の口から語らせる設定にしたのかという疑問が生ずる。『異邦人』の場合には，「祖母」が登場していないから，ということで説明がつくとしても，『ギロチンに関する考察』は評論であり，著者カミュが直接に語っている。

たとえこの逸話を最初に語ったのが祖母であったとしても，子供が話の真偽を母親に確かめないわけはあるまいから，母親もまた語ったのであろう。カミュはこの話を「10歳くらい」26)のときに聞いたと言っている。

この逸話に向けるカミュの偏執的関心は，精神分析の見地からすると，一般にカミュのエディプス・コンプレクスにおける去勢不安の表われとして解釈される（コスト，パンゴー，ガサン）。またカミュ自身が，そうした文脈でこの逸話を『異邦人』では使っている節が見える。エディプス期は通常3歳から5歳にかけての間と言われているから，もしその頃この話を聞かされていたなら，このような「アルジェリアのエディプス」（パンゴー）という解釈も，ずいぶん説得力のあるものとなったことであろう。

だがカミュ自身が示唆しているかに見えるこのエピソードのエディプス的解釈というのは，一種の隠蔽記憶ではないかと思われる。というのも，祖母も母親もアルベールにはその父親について「誉め称えていた」(25)ということで，「怖しい父」（パンゴー）のイメージを抱かせるに足る逸話を「10歳」前後までは息子に聞かせた形跡がまったくないからである。アルベールにとって父親は，「軍功章と戦功章」が「金色の額縁」(30)に収まっている，「栄光に包まれた」(29)立派な軍人ではあっても，祖母も母親もそれ以上の具体的な関心を息子の前では示さなかったようだ。結局，父親は，とりわけ息子とその母親にとって，いわば「私たちには関係のない人」(503)のひとりであったのだ。

逆説的だが，それゆえにこそ〈父〉なる存在はアルベールにとって，祖母を中心とする女系が支配的な家族の「閉ざされた世界」(39)から，〈母〉拘束のバリアーの外へと息子を導き出してくれる人として，心中密かに待望されていたと思われる。事実，カミュはその生涯を通じて，敬愛の念を惜しまない父親代理者を次々と見出していくのである。

家族の間では伝説的なまでに「勇敢」(29)な軍人である父親が，そして，死刑囚が「子どもたちを殺したこと」に「とくに憤慨したらしい」父親が，刑の執行を見に行って，帰ってくると「吐」いた。死刑は当然の懲罰であり，日常的世界の「秩序」を維持するためのひとつの「儀式」にすぎないものとして考えていたのだが，死刑の「真実の姿」は「おぞましい」ばかりで，そ

のような日常的な秩序意識を混沌のうちに陥れるものであった。「殺された子供たちのことを考えるどころか，つい今しがた台の上に投げだされ，首を斬り落されたあのひくひく動く屍体のことばかりが，頭にこびりついていた」[27]というのだが，その話を聞く息子にとっては，「子供たち」の味方のはずの父親が，「子供たちのことを考える」どころか，自分の身すら守れない弱い存在になっている。まるで父親が「首を斬り落された」かのようなのだ。そして，父親と同一化してこの話を聞く息子にとっては，「ひくひく動く屍体」とはまた自分自身のことでもあるだろう。

カミュ自身は死刑の執行を生涯一度も見たことはなかった[28]。ロットマンによれば，「殺人犯はカスバの後にあるバルブルス刑務所で，午前三時の鐘を合図にギロチンにかけられた。それで子供たちは家に帰らずに，処刑を見物に行くことがよくあった」というが，アルベールはそうした「子供たち」の「探険」(43)に加わったことは一切なかった。処刑は少年アルベールにとって得体の知れない無気味なXであり，また一生そうであったのだ。

もしアルベールが幼児期における遺棄という原体験において，母に殺され母を殺すという妄想を抱き，それを罪の意識とともに抑圧したとするなら，そうした無意識的空想こそが，この強烈な印象を残す逸話の場面をいく度となく脳裏に再現したであろう少年にとって，その潜在内容であったのではないか。つまり，「沈黙」し「無関心」でありながら，突如として激しい情動を露わにして息子を恐怖と混乱に陥れる母こそがギロチンの陰に潜んでいるのであり，父までもそれには無力であって，「子供」の自分もいつかそこで〈母〉＝ギロチンに殺されるのであると。

後年カミュは先に引いたヴィッジアニの質問表への答えのなかで，自分の母親との関係を振りかえって，「それはもっとこみいったことなのだ――私の母はたぶん情愛を示してはいたのだが，我々が期待していたほどにではなかったのだ」[29]と述べた。それはある程度事態を正確に言い表しているのではあろうが，幼少年期の「無限の愛の欲求」（ウィニコット）に少なくともあ

からさまにはもはや衝き動かされなくなっている者の言葉であることに注意すべきであろう。母親は「身の回りで起こることに完全に無関心であるように思われた」とヴィッジアニがしたところ，カミュは「ほとんど」と書きかえさせた。それは成熟したカミュが公正の精神から「そのほうがより正当だろう」[30]と考えてのことなのではある。だが，彼の無意識においては，それはかつて幼い頃の心理的な操作の反復なのでもあろう。幼少年期のアルベールも，母親が自分に「無関心」で自分を愛してくれていないと見えるのは，「見かけの上で」のことなのだと思いこもうとしていたのであり，「燃えるような渇き」を伴う愛されたい欲求を抑圧して，母親の「無関心」を「愛の或るひとつの形」[31]と思いなすことで断念をはかろうとしたと思われる。アルベールのように生来豊かな感受性と愛の能力に恵まれた子供は，不断にこのような心理的操作をくり返すことで，自分は母即世界に「見掛け」以上に愛されているのだと自分を納得させ，そうすることで母即世界に拓けてゆく自分の生の足場を築いていったのであろう。そこには確かに幻想がある。ただそれは，そのような幻想なくしてはひとつの生が成り立ちえなかったたぐいの幻想なのだ。

そして，母の「優しい無関心」[32]が「愛の或るひとつの形」であり，それも理想的な愛のあり方のひとつであると思うとき，そのような考えの正しさを裏付けるものとして，亡き父への母親の態度があったであろう。母はなるほど息子の前で父を「誉め称え」はするが，ただそればかりなのであって，母が父との間で交した情愛の深さや濃やかさを証すものは何ひとつない。母は父を「金色の額」に収めて忘れてしまったかのようである。だが，それは「見掛けの上で」のことなのだ，と思いなすことによって，父と母との関係と，自分と母との関係をパラレルに置き，そこに同じ「愛の或るひとつの形」を認めて息子は心を安めたのであろう。

そのような心理的な文脈を背景として，アルベールが思春期にさしかかったか，そのさ中の頃に中年の母親が起こした恋愛事件を見なおすと，それが

どれほど息子の心を震撼し深い傷をもたらしたか了解されるように思われる。母は息子を三重の意味で裏切ったのである。第一に，母は「沈黙の世界に，独りで暮らし，身の回りで起ることに完全に」あるいは「ほとんど」「無関心であるように思われた」という見掛け，あるいは息子の思い込みにもかかわらず，そうではない反面をもっていることを示した。第二に，この他の愛は母には不可能だと息子が信じていた「或るひとつの形」以外の愛も母には可能であることが分った。息子が嫉妬に苦しめられたであろうことは想像するに難くない。第三に，母との関係において自分と父親を同一視していた息子から見て，母の恋は亡き父への裏切りである。息子が嫉妬に深く動機付けられた義憤に駆られたであろうことも容易に想像される。心の中で，祖母と同じ口調で「売女」(34) 33) とののしりもしたかもしれない。このような心理的葛藤を想定すれば，息子が母親の恋愛をめぐる騒動に深い関心をもつことも頷けよう。叔父はアルベールの母の恋人を叩き出し，さらにカトリーヌにつめ寄って，兄リュシアンが「間に割って入って母をかばった」(33) という。この叔父の怒りはアルベールの怒りでもあったであろう。また，母のこの裏切りは，あの原初の遺棄の体験における怒りを活性化させるものでもあったであろう。

密かな情動に時としてその身を震わせることはあっても，常は「沈黙」し「独り」で「無関心」に生きている母，ちょうど「優しく物静かな」猫のような存在，それが今はまさに盛りのついた牝猫なのだ。中年ということで，息子にとってその印象は余計に強かったにちがいない。

ロットマンが復元してみせてくれる限りでのことだが，カミュとその最初の妻シモーヌ・イエとの関係は，この母カトリーヌとの関係の反復とみなすことも可能である。その行状について良からぬ噂があったにもかかわらず，そして婚約者フーシェを棄てて自分のもとに来た女であるにもかかわらず，「妖婦」(73) のうちにカミュは「清純な姿」のみを想い描いて倦まず，自分の「夢想の対象」(75) に，彼自身の言葉では，「モルモット」(134) に仕立て上げてい

たのである。もちろん彼女は，母カトリーヌのもたない面をもっていて，それが彼を魅了しもした。彼女は無学文盲のカトリーヌとは正反対に「明敏な知性を備えていて，飲みこみが速かった。」彼女は正規の学生ではなかったが，大学で「ときどきカミュと一緒に講義を聞」(75)きもした。彼女は，「沈黙」のうちに「閉ざされた世界」から，開かれた世界へとカミュと歩みを共にすることができ，カミュの精神の世界，豊饒な言葉の世界を理解することができたのだ。おまけに裕福な家の娘で，お洒落なシモーヌは「社会的成功の象徴でもあった。」(75) このような母カトリーヌがもたず，望ましく思っていた長所をもつシモーヌのうちに，カミュは「夢想の対象」しか見なかった。母との関係の場合と同じく，内的対象としての〈良い母〉のイメージを投影していたのである。だからこそ，妻シモーヌの不貞が紛うかたない事実として明らかになったとき，それまで彼女の品行にかかわる噂に耳を塞ぎとおしてきただけに，それだけ一層彼女を許すことはできず離婚を決意するに至ったのであろう。それは母の恋愛を知ったときの嫉妬と怒りの再現でもあったと見ることができよう。

シモーヌの不貞が発覚したのは1936年7月であるが，『手帳』34)の第1巻，すなわち「1935年5月から1937年9月にかけて」の分に，「切り抜きやモンタージュがたくさんある」(104)というのも，シモーヌにかかわる記述がその原因のひとつであったにちがいない。「多くの登場人物についてはっきりと実在の人物が指摘できる『幸福な死』の草稿からさえ，彼女は欠落しているように見える」(91)とロットマンは言っている。ヴィッジアニの「あなたの最初の結婚について仔細を述べてくれませんか」という願いに対して，カミュは「駄目です。苦しい経験でした」35)と答えるのみであった。ただし，カミュが否定していたにもかかわらず，「カミュに大層近いところにいた友人」の証言によれば，『手帳』にある「ジャンヌ」と『ペスト』の中の「ジャンヌ」は，1935年頃のカミュの愛人」36)であるとヴィッジアニは述べている。1936年9月には別居し，4年後には離婚することになる。「死ぬま

でカミュは，シモーヌ・イエを助けに来てくれるよう懇請されることになるが，彼が援助を渋ったことは一度もなかった。」(75) 裏切りにもかかわらず，である。それは，一般に知友が苦境にあるときも親身に接しつづけ，可能な限り援助を惜しまなかったというカミュの対人的姿勢のひとつの現われでもあるが，またやはりシモーヌ体験が単なる「眩いばかりに美しい娘」(73)との恋に終るものではなかったことを証するものでもあるだろう。

（この項終わり）

〔注〕

1) Herbert R. Lottman, *Albert Camus*, 1978, du Seuil. 同書からの引用の訳文は，若干の用字変更などを除いて，ほぼ既訳（『伝記アルベール・カミュ』大久保敏彦・石崎晴巳訳，清水弘文堂，1982年）のまま。

2) Albert Camus, *L'Envers et l'endroit*, 1958, Gallimard.

3) 引用文に直続する（　）内の数字は『伝記アルベール・カミュ』仏訳書のページ数を示す。以下同じ。

4) Carl A. Viggiani, « *Notes pour le futur biographe d'Albert Camus* », *Albert Camus I, Revue des Lettres Modernes*, n°s 170–178, 1968, p. 204.

5) Albert Camus, *La Chute*, 1956, Gallimard, p. 18. なお，訳文は〈新潮世界文学48〉『カミュ　I』に収録されている『転落』佐藤朔訳のまま。

6) Albert Camus, « Sur une philosophie de l'expression *de Brice Parain* », *Essais*, 1965, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, p. 1673.

7) Camus, *L'Envers et l'endroit*, p. 25.

8) *Ibid.*, p. 27.

9) *Ibid.*, p. 15.

10) Viggiani, *art. cit.*, p. 206.

11) Camus, *op. cit.*, p. 27.

12) *Ibid.*, p. 30.

13) Albert Camus, « *Lettre à Jean de Maisonseul* », *Essais*, p. 1219. なお，訳文は『カミュ全集1』（新潮社，1972年刊）収録の高畠正明訳「ジャン・ド・メーゾンスールへの手紙」のまま。

14) Gabriel d'Aubarède, « *Rencontre avec Albert Camus* », *Essais*, p. 1339. 訳文はほぼ『カミュ全集5』（新潮社，1973年刊）収録の若林真訳「アルベール・カミュ会見記」のまま。

15) *Ibid.*, p. 1340.

16) *Ibid.*, p. 1343.

17) Eric Sellin, « *Interview d'Edmond Charlot* », *Albert Camus 3, Revue des Lettres Modernes*, n°s 238–244, 1970, p. 156.

18) *Ibid.*, p. 157. また, Lottman, *op. cit.*, p. 533.

19) Albert Camus, *Actuelles, III, Chroniques Algériennes. 1939–1958*, 1958, Gallimard, p. 125.

20) Camus, *Essais*, p. 1843.

21) *Ibid.*, p. 1882.

22) Camus, *L'Envers et l'endroit*, p. 28.

23) Viggiani, *art. cit.*

24) *Ibid.*, p. 204.

25) Albert Camus, « *Réflexions sur la guillotine* », *Essais*, pp. 1019–1064. 以下訳文は, ほぼ杉捷夫・川村克己訳『ギロチン』(紀伊國屋書店) のまま。

26) Viggiani, *art. cit.*, p. 204.

27) Camus, *art. cit.*, p. 1021.

28) Viggiani, *art. cit.*, p. 208.

29)-30) *Ibid.*, p. 204.

31) Camus, *L'Envers et l'endroit*, p. 31.

32) Albert Camus, *L'Etranger*, Gallimard, 1942, p. 171.

33) ここでロットマンは『最初の人間』(Albert Camus, *Le Premier Homme*, 1994, Gallimard, p. 116.) を資料としている。

34) Albert Camus, *Carnets I*, 1962, Gallimard.

35) Viggiani, *art. cit.*, p. 211. ただし, 二度目の結婚についても委細を語ることを断わっている。(*Ibid.*, p. 215.)

36) *Ibid.*, p. 211. もっとも,「愛人」という言葉は, 文脈上からシモーヌのことをさしていると判断されるのであるが, シモーヌとカミュは 1934 年 6 月に結婚しているので, 奇妙な言い方ではある。